意　見　陳　述　書

2008 年 3 月 28 日

中華人民共和国河南省原陽県官厰郷李悦村
暢同道

1.　私は暢同道といい，1924 年 8 月 22 日生れで，今年 84 歳になります。1944 年 6 月、県城（原陽）に行ったとき日本軍に包囲され、大きな家に連行されました。何日か閉じこめられ、捕まえられてきた人が多くなり、列車に押し込められ、山東済南新華院へと護送されました。連行された時，わが家は、7 人家族でした。新華院で私たちは隊編成されました。その後列車に押し込まれ青島に送られました。青島についてから上船させられました。上船して 7 日たって下関につきました。下関で下船してから，消毒させられ、その後、列車で七尾に連行されました。

2.　七尾に連行して私たちに苦役を強い、荷物を卸し担がせました。袋一つは２００斤（１００kg）あり、当時私は２０数歳で、力がなく、担げませんでしたが、監督らは承知せず、無理矢理私たちに担がせました。

　食事は、糠でつくった小さな餅が子一食に二個だけで、お腹がすいてたまりませんでした。毎日、夜が明けないうちに出勤させられ、日が落ちて暗くなってからようやく退勤になりました。８～９割の日は残業でした。残業になると夜中の１２時をこえることもしょっちゅうでした。

3.　大きな船は接岸できないので、艀に積み替えて、艀を接岸させていました。その日、私は艀で袋を担がされていましたが、風が強く、渡し板が大きく揺れ、とても不安定で、私は荷物を担いだまま落ちてしまいました。日本の監督はこれを見て、棍棒で殴りつけました。何回も酷く殴りつけ、腰を痛め、生涯続く腰痛の障害になってしまいました。

4.　　日本の投降以後、一銭も支払いませんでした。列車で博多に送り、博多で列車を降り上船して、中国の塘沽に着きました。家に帰るのに、お金がなく、歩いて帰るしかありませんでした。天津から河南の原陽では五百～千キロの道を、二ヶ月あまりかかってようやく家に着きました。

5.　　連行される前、私の家族は７人で、祖父、祖母，父母、二人の妹がおりました。家に着くと、祖父と祖母は両眼失明しており、父母はいませんでした。妹にどうしたのかとたずねると、妹たちは泣きながら言いました。私が日本兵に連行されてから、父母はショックでなくなり、祖父祖母と泣きはらして失明し、妹たちは物乞い、乞食をしてなんとか生きてきたとのこと。それを聞いて私はとても苦しくつらい思いになりました。むつまじい一家が、破壊されてしまったのです。

6.　　もし日本が中国を侵略占領せず，私を強制連行していかなければ，祖父祖母は失明したでしょうか。父母が亡くなったりしたでしょうか。二人の妹が乞食をしたでしょうか。私の腰は生涯痛み続けたでしょうか。

7.　　数十年もの間、日本政府と企業は一言の詫びの言葉もなく、一銭の金も払っていません。私は、日本国政府と企業が，謝罪し，経済損失を賠償することを強く要求します。裁判官が公平、公正な判決をなされることを願います。

以上の文章は私が翻訳いたしました。

奈良市福智院町３